



国際湿地楽園都市をめざしましよう!!

2022年に新潟市が、「ラムサール条約の国際湿地都市」認証を受けた。Wetland Cityというとディズニーランドではないが“楽しい場所”という動的なイメージがある。漢字の「湿地都市」では、水鳥や Wise Use 農業の田園都市という静的なイメージで、潟湖の中で楽しむ市民の活動という動的なイメージが湧かない。

■国際湿地都市から国際湿地楽園都市に!!

かつて鳥屋野潟周辺の人々は潟辺を暮らしや稼ぎ、楽しみ、学びなど愛でる場としてきた。かつては腰まで水に浸かる湿田農業や肥料にする湖底泥の舟上げ、漁や狩猟、ヨシ刈り、ヒシやハス採り、水源としての水汲みや洗濯、釣りや水浴、舟遊びの日々だったと聞いている。

一方、市民は、潟を眺める食事、ボート遊覧、大学や企業はヨット俱楽部スポーツなどがあり、多様で濃い潟と人との関係があった。そのため、潟辺には桟橋や船小屋、料亭が十数軒、湖上には100艘もの手漕ぎボートやヨット、伝統的な木舟の板合わせが浮かび、休日には橋の上から眺める人だからがあった。まさに湿地のシンボル潟湖は市民の楽園だった。

市民の楽園は、今ではヨシ原に被われ、秋に飛来するハクチョウなどカモ、サギの水鳥楽園だ。外来種のカメの楽園でもある。誰も利用せず、辛うじて、潟辺の学校の学習利用と小さなイベント利用があるだけだ。

■楽しく嬉しいWell-beingの湿地都市へ

「Well-being（ウェルビーイング）」という考え方がある。直訳すると「幸福」「健康」という意味らしい。湿地水辺の Well-being なら、楽しいを超えて幸福感のある“嬉しい湿地水辺”だろうか。それは、上述したように誰もが潟湖を楽しみ、嬉しい時間を過ごした1960年代これまでの潟湖の姿だったのではないだろうか？

では、その“嬉しい湿地水辺”を実現するにはどうしたらいいだろうか？湿地水辺を楽しむ人を増やす、あるいは楽しみ方を掘り起こし、試し、広げることか。

当会は、自らウォッチングやカヌー、水上バス活用などで、川や潟の水辺を体験し、楽しんできた。今では、鳥屋野潟公園内で、市民のカヌー体験を指導する「カ

ナール de カヌー」や潟湖上での多様な環境体験、空芯菜の湖上栽培、体験学習支援などで“嬉しい湿地水辺”的実現、普及にトライしている。

そこで感じる本当の“嬉しい湿地水辺”的実現とは、誰もがいつでも潟中に入って楽しめる「安全で健康な環境インフラ」と、それをガイドし指導できる「体験プログラム」、官民が支援する持続の仕組み「サポートプラットフォーム」の3条件が整っていることだと思う。

まずは常設で体験できる“楽しい水辺”を実現したい。

■ 16潟体験にいざなう、潟守と若者とのペア潟ガイド

市民参加を誘う新潟オリジナルの里潟ガイド人材を育てたい。当然、有償のプロ、アマプロの体験型ガイドだ。それには、16潟の美しい映像ガイドに加え、それぞれの潟の楽しみや個性を自らの体験体感を通して語り、特技のパフォーマンスで潟の魅力を伝えることができるインター・アシスタントガイド（仲介人）が望ましい。

“老若2人体制”的里潟チームガイドは新潟発（初）としたい。一人は、かつての潟暮らしの経験を語り、自慢出来る地元の老潟守ガイド。相棒は、参加者を潟の体験に誘い、参加者の関心のある里潟 Q&A を引き出し、里潟の魅力を伝える若者ガイドだ。

若者ガイドは、学生のイメージだが、留学生や自称若者のシニア市民でもいい。音楽、踊り、アート、マンガ、俳句、遊び、料理、通訳、スポーツなど持っている一芸で表現できるガイドを期待したい。また、若者には、最新の電子機器を使い「情報」、「翻訳」、「映像」を参加者に伝えるITサポートを期待したい。

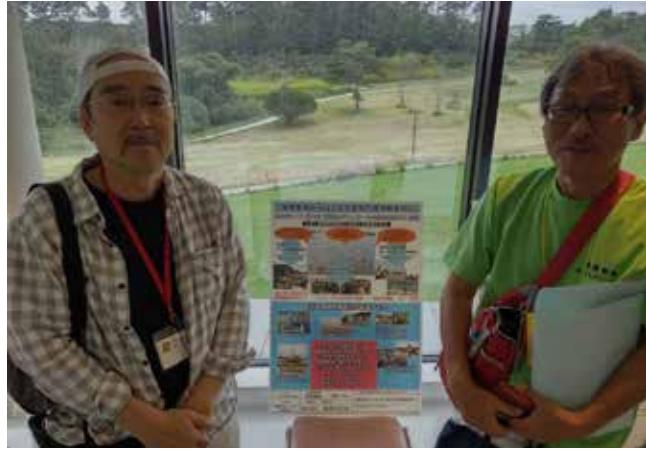
ガイドは、うまくいけば“誇りや成功体験”になり、失敗すれば、“学びや表現力不足”的課題に気づく。OnJobで自己達成、自己革新する里潟ガイドだ。ゴールは、潟を誇るEco-Pride。里潟インター・アシスタントガイドから、“都市の新しい自然観”的芽が出ることを期待したい。

国際湿地楽園都市では、潟の魅力自慢Eco-Prideの再生発展を戦略としたい。それには潟を使うEco-Useから改善Eco-Upと資源循環Eco-Cycle展開が必要だ。そこから“里潟”的持続的な再生発展が始まる。

顧問（特任） 相樂 治

第15回“いい川”・“いい川づくり”ワークショップ in 東北で発表してきました。

2023年9月30日(土)、10月1日(日)の2日間、東北大学(仙台市)を会場に開催されたワークショップに長谷川代表と一緒に「鳥屋野潟からはじまる都市型環境教育旅行」をテーマに発表してきました。



発表者の森本副代表（左）、長谷川代表（右）

発表内容は昨年、国内初の「ラムサール条約湿地自治体」に認証された新潟市の中心に位置する鳥屋野潟には様々な問題があるが“都市型環境教育旅行”を通して、自然を肌身で感じた小・中学生が鳥屋野潟の魅力を発信するガイド(案内人)だけでなく自然と人を紹介するインタープリーターの存在になってほしいというものでした。



発表の様子

1999年の“川の日ワークショップ”で星島卓美さんと通船川をテーマにグランプリを獲った経験があるので雰囲気は知っていたつもりでしたが3分間で発表するのは結構難しく、直前のリハーサルでは長谷川代表が作ったシナリオを半分以上カットすることになりました。

31団体が参加した全体発表会の後、会場を移動し、6グループに分かれて再度発表し、各グループの上位2団体が翌日の入選者発表会に進めるという方式でした。



発表の様子

入選者発表会には進めませんでしたが、地元漁協と友好的な関係を築いている事、空芯菜の販売など利益を生む仕組みができている事など発展性が期待できるとして「ハスやマコモを学ぶツアーを盛り立てま賞」を受賞しました。(全団体が賞をもらったのですが)

グランプリは“十勝川の伐採木が動物たちのエサに”(国土交通省北海道開発局帯広開発建設部帯広河川事務所、西江建設株式会社)が「十勝川は動物も喜ぶ連携モデルで賞」を受賞しました。

準グランプリは“人と温泉と生き物と～亀川温泉発!生き物好きによる「泉都」別府の新たな魅力の発掘!”(NPO法人北九州・魚部)が「生きもの好きが溝をのぞいて伝える町の魅力で賞」を受賞しました。

ほかに入賞、入選、広松伝賞、森清和賞、“いい川”技術賞などが授与されました詳しく述べるNPO法人全国水環境交流会のホームページをご覧ください。

大会後は実行委員である相楽前代表(現顧問)と一緒に久しぶりに青葉城を見学し帰路に着きました。

コロナ禍後の久しぶりの大会であり、全国の人たちと交流出来たことや様々な切り口の活動があることを知ったことは、これから的新潟での活動を考える上で、大きな刺激になりました。

来年の大会では“都市型環境教育旅行”について、もう少し具体的な姿が発表出来ると思います。

副代表 森本 利

report 03

鮭の発眼卵河床埋設放流の報告

令和5年12月17日、今回も間瀬の宝川で「鮭の発眼卵河床埋設放流」を行いました。大荒れの天候のなか県内外より、また小さい子供さんから大人まで総勢24名（3名が車のトラブルで遅刻）の皆様にご参加いただきました。寒い中ありがとうございました。

この事業は13年前から行われており、宝川になつてからは7回目となります。私自身は6回目の参加。私の息子も4回参加しています。たまたま偶然見つけたこのイベント、これがこの会の会員になるきっかけとなり、昨年から世話人となりました。不思議なご縁です。



鮭の発眼卵河床埋設放流に参加の皆さん

「河床埋設放流」とは、川底の砂利の中にパイプを差し込み、そこに発眼卵を流し込むという手法です。この手法によるメリットは卵までは人が管理し、孵化して稚魚になった以降の成長を自然界に委ねることにより、従来の稚魚放流と比較して飼育コストを削減することができます。また、この宝川は水量も豊富で、川の泥などの影響を受けず埋設した発眼卵の90%以上が孵化して海に出て行っていることが調査でわかつています。こうして海に出ていった鮭の稚魚は3~5年ほどすると、また産まれたところに戻ってきます。母川回帰のメカニズム、鮭の一生と食物連鎖など、知れば知るほど益々興味が湧いてきます。

参加者も新潟水辺の会のスタッフ以外で、寄附をいただいている三菱UFJ銀行の関係者、松野尾コミ協、矢垂クラブの皆様、そして長野県など県外からの参加者や親子での一般参加者など年々増えてきました。ありがとうございます。

今後も永年この事業に取り組んでおられる本会の加藤顧問（前副代表）にご指導いただきながら、引き続き頑張って参りたいと思います。

世話人 飯塚 芳英

report 04

潟辺のエネルギー～がってん基地で再生エネルギーの活用

新潟市内で潟辺はと聞かれたら鳥屋野潟と答えるでしょう。低湿地の鳥屋野潟は新潟駅から2kmの街中にあり、運河で繋がる清五郎潟の白鳥が飛来する水辺の側に「がってん基地」があります。

樹木に囲まれた自然豊かな環境は太陽光が降り注ぎます。鳥屋野潟へ流れ込む栄養に富む湖水を海に無駄に流さず空芯菜への水と肥料として使い、栽培のエネルギー源となっています。

空芯菜の育苗から潟の筏に定植するまでの栄養水を電動ポンプで散布する電気が必要となり、初めはエンジン発電器を使う事で騒音と排気ガスが悩みの種でしたが、無尽蔵の太陽光エネルギーでのソーラーパネルによる発電とバッテリーへの充電で静かな自給自足の電源を使用します。基地の周辺の太陽光は良い陽当たりと水からの反射で発電効率は最高です。



鳥屋野潟周辺の小学校の総合的学習の様子

この畜電力量は微弱ながら照明、パソコン、プロジェクター、工具用電池や携帯電話の充電などにも使っています。

電気設備も整い空芯菜も育ち船着場もあるこの場所を基地にカヌーやSAPなどの四季を感じながらの水に関わる体験学習の拠点として小中高大学生から社会人までのセミナー施設となります。

次の新エネルギーは5月までにGATTEN LABOの屋根高く吹く風で回る風車で風力発電を行いますのでご期待ください。

新潟市は国内初ラムサール国際湿地都市認証を得て、潟辺の「がってん基地」は鳥屋野潟の肥沃な水や太陽光と風力の満ちた自然エネルギーを利用し、水辺から情報発信の中核となりましょう。

世話人 渡邊 充

■水辺レポート

～ラムサール国際湿地都市 新潟の何が変わる！？～ 新潟水辺の会シンポジウム 2023 を開催

2023年度の水辺シンポジウムは12月9日(土)新潟市市民活動支援センター(ニコット)で開催されました。



2022年に新潟市が国内初の「ラムサール条約湿地自治体」に認証されたことを受け、今後「国際湿地都市」としての取り組みや情報をどう発信していくべきか?未来に向けた街づくりをどうすべきか?パネリストをはじめ参加者による活発な意見交換が行われました。

第1部は「何が変わるか?」をテーマに、3名のパネリストから「国際湿地都市認証に期待すること」を発表していただきました。

まず新潟国際情報大学教授で新潟市潟環境ネットワーク代表でもある澤口晋一氏は、

新潟市独自の特徴である潟と砂丘を活かした都市政策が必要と訴え、その保全・活用のために地元団体と協力し、次世代のリーダー養成が肝心と解説。また「国際湿地都市・新潟」としてのブランディング推進のための広報や認証ラベルなどの商品開発、さらに拠点となる博物館の設立などを提言されました。

続いて新潟市環境部環境政策課の小泉英康課長からは、湿地自治体認証制度の説明から始まり、「人と自然が共生する国際湿地都市・新潟」の実現に向けた取り組みとして①プロモーションなどの展開②里潟ボランティアガイドの育成③佐潟の再生の三点を新潟市が令和6年度に実施する計画を述べられました。また湿地自治体認証を受けて以降、ウガンダ、中国の東営市、韓国のチャンニョン市からの視察団が佐潟、福島潟を訪れたとの報告もあり、海外からも注目されていることが感じられました。

最後に新潟市水族館館長でウェットランド新潟の会員でもある野村卓之氏から発表があり、2017年からラムサール湿地自治体認証に向けた登録推進の活動を行

なってきたウェットランド新潟の活動経緯や、新潟市をPRするためのロゴマーク選定の取り組みなどを紹介されました。

発表の後は、湿地都市認証に関する事前アンケートの結果を紹介しました。回答からは湿地都市認証に対して多くの方が肯定的に捉えており、新潟市にある16の潟などを活かしたPRを推し進めることが大切だと感じていることが伺えました。

コメントーターの大熊孝・新潟水辺の会顧問からは、滋賀県立琵琶湖博物館と新潟市と同じく湿地都市認証を受けた鹿児島出水市のツル博物館を例に、新潟市にも自然博物館が必要であり子どもたちへの教育や啓発が重要であるとのコメントで第1部を締めくくりました。第2部までの休憩時間には、かつて水辺の会でよく歌われていた「川面に歌を流そうよ」の森本利・副代表によるギター演奏に、会場が声を合わせ和やかな雰囲気に包まれました。

第2部では「何を変えるべきか?」をテーマに、会場からの質問を受けながら意見交換が行われました。会場からは、市民が休日のたびに潟へ遊びに行き「買う食う、遊ぶ学ぶ」が体験できる空間整備が必要との意見や、市長が率先して「潟」を主体としたPRを展開して新潟市のブランド力を上げて欲しいなど積極的な要望などが交わされ、湿地都市認証登録を受け、新潟市を盛り上げたいという参加者の関心の高さを感じられました。

大熊孝・新潟水辺の会顧問から、80万人都市の新潟が湿地都市認証を受けたことは世界的に見ても素晴らしいことであり、今後に期待したいという発言で締めくくりました。

閉会の挨拶に立った安田幸弘・副代表から湿地都市認証を受けた後の市民への周知が行き届いていないのではという指摘と、個別に活動している環境団体が今後の具体的な活動展開を議論できるプラットフォームの開設や、啓発や環境活動に対する継続的な活動支援のための財源確保・収益化の必要性を提案し、2023年の水辺シンポジウムは閉会いたしました。

シンポジウムの様子は2次元コードから新潟水辺の会YouTubeチャンネルで視聴できます。

代表 長谷川 隆



新旧代表者の座談会 ～これからの新潟水辺の会を多いに語る～

2023年7月29日の第23回通常総会で長谷川隆さんが3代目の代表に就任しました。

これを機会に大熊元代表(1987～)、相楽前代表(2015～)、長谷川代表の3名で会の将来などについて話していただきました。(進行:森本副代表)



座談会の様子（左から相楽、長谷川、大熊）

森本:1987年10月15日に「柳川堀割物語」の上映会から会はスタートしたのですが、その時の話を聞かせください。

大熊:映画に描かれているように、人と自然との関係性を考え直し、市民の皆さんと協力して、何かやれないと考え、立ち上げました。

相楽:川との関わりの初めが通船川で、無我夢中でドブ川の再生活動を行い、その後サケが遡上できる信濃川の復活運動に広がって行きました。大熊代表から引き継いだ時は、身近な水辺でその当事者達と一緒に汗を流す活動をしてゆこうと思いました。その1つ、鳥屋野潟での空心菜プロジェクトなどで少し潟の再生発展につながる種まきはできたかなと。

長谷川代表にお願いしたいのは、次の世代の子どもたちがいつでも川や潟に近づける環境と指導できる人がいて、それを周りから物やお金で応援できる人がいる、そんな仕組みを実現してほしいと思っています。

森本:長谷川代表の心意気ややりたい事を教えてください。

長谷川:大熊先生の話を聞いたり、本を読んで水辺に興味を持ったのが入会のきっかけです。

皆さんと一緒に楽しく活動できる会にしたいので、色々な企画も考えてゆきたいです。

森本:長谷川代表からは形にこだわらず、参加する人を増やしたいという話がありましたが、大熊さん

からはこんなことができるのではという話はありますか？

大熊:水辺の会はある意味、高い目標を掲げるとともに、国内外の水辺ウォッキングを楽しみながらやってきましたが、水辺に親しむことや自然との共生は国民の琴線に触れなかったようです。

今は、会の初期の頃のようにウォッキングなど会員が楽しくやって行くことを中心にして良いのではと思っています。

森本:水辺の会の魅力は敷居が低く、参加しやすく、楽しく活動できることだと思いますが、相楽さんは長谷川代表に期待することは何でしょうか？

相楽:その地域らしい水辺の形があると思うので、地元の人が支えて水辺に触れる場所を確保してほしいと思います。今までやってきた空心菜のプロジェクトを、若者を交えて楽しく発展させてほしい。

長谷川代表は映像のプロなので、SNSを駆使しての情報発信や体験教育ツアーバーを通じてプロのガイドなどの育成をやってほしいと思います。

森本:新潟はエンターテイメントを勉強している学生も多いので、若者の力を使って会の活動を伝えてゆくのも面白いと思います。

相楽:新潟市は「ラムサール条約の湿地自治体認証」を受けた国内初の都市なので、これを追い風にして、若者が活躍する新潟スタイルを作り出すチャンスと思っています。

大熊:新潟市が湿地都市認証を受けたことで今までと状況が変わってきているので、会もこの動きに連動できたら新しい活動ができると期待しています。

長谷川:いい川づくりWSに参加して感じたのは、全国には色々な活動をしている団体があり、新潟でも様々な活動をしている人がいるので、認証をきっかけにそれらの人を集められればと思っています。

異質なものをくっつけて何か新しいものをつくるのも、これからの方針性のひとつかもしれない。

大熊:新潟日報や市報にいがたにも湿地都市新潟が紹介され始めているので、市民にも少しづつ浸透してゆくと思う。

相楽:都市の多様なニーズを潟に引き込んで、潟につながっている人を大事にしながら若者のガイドを育てて外の人を潟に引き入れてゆきたい。外国人など

外部の人にSNSを使って潟の新しい顔を見せる映像を発信できると面白い。

大熊：長谷川さんには会のHPなどで、白鳥が水田でエサを食べている姿などを発信してほしい。

森本：鳥屋野潟は「ここに行けば見える」という場所が無いですよね。

大熊：新潟バイパスの桜木インターチェンジから降りて鳥屋野潟に突き当たる場所は、潟がパッと見えていい場所ですよね。今は見えませんが。ここに潟博物館がつくられればいいですね。

相楽：そこから対岸のビッグスワンの横のカナール地先までが潟の景観戦略軸になります。カナール地先の4本の桜が潟の眺望を遮っていますよね。

大熊：また鳥屋野潟の絵を描いてみない？

森本：鳥屋野潟に話が絞られてきたので、鳥屋野

潟をフィールドにエンターテイメント性のある音楽会などをやって、ここを意識させることをやっていきましょう。

私は今年から新潟市中央区の自治協議会に水辺の会から参加しており、水辺・緑化の分科会に所属していますが、鳥屋野潟をテーマに色々提案してゆくことになっています。

長谷川：水辺の会がこんな活動をしているという事をYouTubeやSNSで発信してゆきたい。

大熊、相楽：長谷川代表が得意な映像教室をやってみては？

森本：今日はこれから水辺の会のあり方について色々話をさせていただきました。

どうもありがとうございました。

まとめ 副代表 森本 利

『イオン幸せの黄色いレシートキャンペーン』 参加のお知らせ

スーパーマーケット等を展開しているイオングループ株式会社では毎月11日に「イオン幸せの黄色いレシートキャンペーン」を行っています。この日、イオンで買い物をするとレジ精算時に黄色いレシートが発行されます。これは社会貢献活動の一環で、黄色いレシートを店舗にあるボランティア団体の投函ボックスに入れると、レシートの合計金額の1%相当の物品が団体に寄贈されるキャンペーンです。

新潟水辺の会は今年度、寄贈対象の団体に選ばれ、次の24店舗に投函箱が設置されます。毎月11日にお近くのイオンで買い物をされた際には、新潟水辺の会に黄色いレシートを投函ください。よろしくお願ひいたします。



実施している店舗

- ①イオン亀田店 ②イオン笹口店 ③イオン山二ツ店 ④イオン上木戸店
- ⑤イオン村上肴町店 ⑥イオン藤見町店 ⑦荒川アコス店
- ⑧イオンスタイル上所 ⑨清水フードセンター大学前店 ⑩清水FC小針店
- ⑪清水FC青山店 ⑫清水FC坂井店 ⑬清水FC関屋店
- ⑭清水FC西内野店 ⑮清水FC山の下店 ⑯清水FC河渡店
- ⑰清水FCとやの店 ⑱清水FC西堀店 ⑲清水FC中山店
- ⑳清水FC湊町店 ㉑清水FC東中野山 ㉒イオンスタイル新津
- ㉓イオン上越寺店 ㉔イオン下門前店



イベント情報

- 通船川河口の森美化活動と川掃除 9/7 (土) 10/5 (土) 午前9時から 通船川河口の森集合
- 新潟市民環境フェア出展 7/13 (土) いくとぴあ食花 花とみどりの展示館およびその周辺
- カヌーSip体験会 6/2 (日) 6/23 (日) 7/7 (日) 7/21 (日) 8/4 (日) 8/25 (日) 9/1 (日) 9/23 (日) 10/5 (土) 10/20 (日) 県立鳥屋野潟公園カナール広場 アルビレックス新潟ホームゲーム開始前
- 第24回通常総会 7/27 (土) 午後 新潟市市民活動支援センター

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会

●事務局 〒950-2264 新潟市西区みずき野4-7-15 大熊河川研究室内

Phone 025-264-3191 (留守番電話の際は伝言をお願いします。)

●ホームページ <https://niigata-mizubenokai.org> ●メール info@niigata-mizubenokai.org

●会員数 個人会員73名、法人会員6団体、家族会員2組、賛助会員2名、顧問6名 (2024年5月15日現在)